COVID19病棟師長の立場から

石島佳代子

大阪府済生会中津病院　北棟13階　師長

北13階病棟は令和２年８月17日に新型コロナウイルス感染症専用病棟としてオープンしました。東７階病棟でコロナに対応していたスタッフと東13階病棟で肺炎病床を経験していたスタッフが多く，その時の経験をもとに運用を考え，感染対策に対する知識やスキルの習得，病気の治療や経過を学び，少しずつこの病棟で看護をする自信に繋がっていきました。未知のウイルスに対し不安や隔離によるストレスを抱えている患者さんに，最小限の時間で看護を行わなければならないという看護師の葛藤や，リモート面会を通して試行錯誤しながら作った患者さんとご家族の時間など，貴重な経験をたくさんしてきました。約１年半，コロナ専用病棟で看護をしてきた看護師の体験を一部ご紹介したいと思います。

病棟立ち上げてすぐの頃，高齢のご夫婦が入院され，別室でお互い治療を受けていました。妻の既往歴はなく出産時の入院経験のみでした。知らない場所で慣れない環境の中，部屋でテレビのニュースを見る中で不安が増大していることを感じた看護師が，時間を作りコミュニケーションを取りながら不安の軽減に努めました。その後，症状が悪化し挿管して転院されましたが，無事に抜管し当院に戻って来られました。順調に治療が進み症状が軽快した頃，涙を流しながら「不安でいっぱいの中，看護師さん達の優しさや笑顔でとても救われました。この経験と感謝は一生忘れません。」と話してくれました。入院中に不安や恐怖を抱えながら療養されている人は多く，私達の声掛けや接し方で少しでも患者さんの不安を和らぐことができると実感し，看護師としてやりがいを感じる瞬間でした。

第３波の時期には施設でのクラスターが多く見られました。当院にも施設でコロナになり入院された患者さんは多くいましたが，入院中に脳梗塞を発症しそのまま亡くなられた患者さんもいました。入院当初は室内での歩行もできていましたが，脳梗塞発症後からADLは低下し，寝たきりの状態でした。病状が悪化し厳しくなる中，ご家族との時間が必要だと思いリモート面会を行いました。ご家族は泣きながら画面に映る意識のない患者さんに一生懸命声をかけていました。私達は「患者さんの傍にいるのに，ご家族は画面越しでなければ会えない，手も握れない・・・」といたたまれない気持ちになり，スタッフ全員が患者さんやご家族に寄り添い，きちんと向き合って看護していきたいという気持ちにつながりました。

ワクチン接種が浸透した頃，発症後の早期治療により軽症のまま退院された高齢のご夫婦がいました。入院前から在宅サービスは受けていましたが，日常生活は自立されていました。退院支援は不要ではないかと考えていましたが，息子夫婦が心配して何度か病院に連絡があり，リモート面会のほうが安心できるのではないかと考え，息子夫婦とケアマネージャーに病院に来院していただき，リモート面会を行いました。病室からご夫婦が画面越しに笑顔で手を振る姿を見て，息子夫婦は「思っていたよりも元気でとても安心しました。画面越しでも会えて良かったです。」と笑顔で手を振り返していました。ケアマネージャーも安心されていた様子でした。笑顔が多く見られたリモート面会は，とても穏やかで家族の不安も軽減できると実感する場面でした。

高齢者の入院は，病状が安定していても環境の変化で認知機能の低下が見られることがあり，１日１日がとても大切です。またたく間にADLの低下が見られることもあります。これらの経験を通して「コロナだから仕方がない」ではなく「コロナだからこそやらなければならない」と鼓舞しながら，これからも自分達のやるべき看護を行っていきたいと思います。

受付け：令和４年６月16日